に出ると、前方に富士山が雲間よりみえる。ああ故国に帰ってきたぞと実感がわき、非常に嬉しかった。

六月二十八日、浦賀入港。検疫後上陸、米軍の装具の検閲後、浦賀引揚援護局宿舎にはいる。復員準備。

昭和二十一年六月二十八日、復員完結、召集解除、戦友と共に（大西、北田、桝、岸、平沢）帰阪す。

この回想記の終りに際し、自隊将兵の冥福を祈る。

ビルマの密林

愛知県　稲垣金増

昭和十五年八月、横須賀海軍徴用軍属として、三重県四日市横須賀海軍建築部に入部しました。当時まだ十九歳、役場の係の人が白紙令状を持って来ました。

「御苦労様ですがなにがなんでも行ってもらはなければ。」

といわれ、国のためですからとのことで行きました。

十六年四月、徴兵検査を受け丙種合格といわれました。同年九月ごろ移動があり、小笠原父島に行きました。十七年に木更津海軍建築部にかわり十八年十一日まで勤務しました。

赤紙令状を受け、十八年十一月三島野戦重砲に入隊しました。同年十二月二十五日門司港を出発、船内はなんともいえないいやなにおいでたまりませんでした。私は船には酔わないが、監視兵として高いマストのうえに登り見張りをしなければなりません。本当につらい思いをしました。約五十日位の船内の生活は、とてもつらく、いよいよ上陸との命令でシンガポールに上陸しました。

一時間ぐらいたった時、数十機の敵機の空襲にあいましたが、怪我人はありませんでした。

私たちの隊は初年兵ばかりで指揮官がおりませんでした。私達の行く本隊はどこにあるかも分かりませんでした。シンガポールでは他の隊とまざり、目的はビルマということでした。ところどころに連絡所がありましたから、その付近で寝たこともあります。

タイ・ビルマ国境にアラカン山脈があり、その山中には虎、豹がたくさんいます。私たちのそばには豹が来ま

した。毎日行軍々々で雨期にはいっておりましたので、足に豆のできる者、水虫のできる者、赤痢でなやむ者、マラリヤにかかる者、本当に本隊までつけるのかと思いました。

山を越えいよいよビルマにはいりラングーンにはいると、本隊から迎えがきてくれました。いよいよ本隊の勤務にははげまなければと心にきめて、内務班長につれられて中隊長に挨拶にいきました。

私たち四十五人一等兵ばかりで

「本当によく無事に来てくれた」

との挨拶でした。

空襲、爆撃、機銃掃射の毎日でした。一日三回ぐらいありました。

古年兵と一緒に舟に乗る者、また食糧、荷物を監視する者で、日々を送っておりましたところ、撤退作戦の命令がくだり、また行軍です。毎日の空襲で、空からみられないところを通り、私は中隊では若年でしたので軽機関銃を持たされていましたが、行軍中に右股に貫通銃創をうけ、長い道でしたが戦友のお蔭でイラワジ川までつれて来てもらいました。

その時、古年兵、戦友たちにはげまされ、

「俺たちは今から筏を作ってこの川を渡るが、うまく渡れば迎えに来るから、力をおとさずに待っておれ」

といきました。約一時間くらいたった時、ものすごい銃声がジャングルでしましたが、まもなく銃声はとまりました。

それからは静かなジャングルを戦友と別れて雨の中を私一人で三時間歩いたころ、大きな音がすると思うと、みたこともない象が七、八頭はいたと思いますが、夜でしたから、はっきりしませんでした。

それから二、三日たっても音沙汰ありません。食べる物もありません。足の痛みも増すばかりでもう自決より仕方がないと思い手榴弾を破裂させようと思っても、はぜてくれませんでした。それを二回やりました。

川辺には竹の子がでており、バナナの木もありました。足の傷はざくろのはぜたようになっており、膿がでて、痛い足をひきずりながら竹の子を食べ、またバナナを食べ、蟻がくれば食べ、大木の下で約十日間くらいお

りました。
もう疲れて寝ておりました。そこにみたこともない車が来て銃をかまえた兵隊一人と他の一人が起こしてくれました。ジープに乗せられ、病院で手当をして、飛行機に乗せられビカネールインド収容所に送られました。

逃避行

東京都　山岸利治

昭和二十年四月中旬、ビルマ国（現、ミャンマー）シャン州に属するカローまで、メイクテーラーからいのちからがら敗走また敗走を続けた。カローに着くやいなや、マラリヤ熱をおこし、まったく食欲もなく数日間、四十度前後の熱にうなされた。
夜ともなると、二メートル角ぐらいの天幕シート一枚をかぶって野宿を続けるしかなく、さらに、アメーバ性赤痢を併発、一日二十数回野原の便所がよいで、心身共に、ぐったりで、ますます食欲もなく一日中、フラフラの毎日でした。
幸いにして、カローには第三十三師団（弓兵団）に属する兵站病院（竹の柱に、ニッパヤシの屋根があるだけ）があり、ここへ入院ということになったわけです。
思えば、十九年四月から始まった中国雲南省竜陵・芒市の戦闘で、ゴム短靴、スゲ笠姿の中国兵の迫撃砲弾の雨にさらされ、無敵帝国陸軍も連日の死傷者続出で、私達の師団も転進を余儀なくされたわけです。
雲南攻略のため通過した要地を、今度は逆に、ラシオ、メイミョウ、マンダレーをへて部隊の建てなおしと次期作戦準備及び再建業務をおこない、十九年十一月より、トングー県トングーで、約二か月警備に勤務した。その間もほとんど毎日、敵機の銃撃を受けていた。
二十年一月、イラワジ河畔の戦況急となり、十分なる再建もできぬまま、ピンマナ、ヤメセン、ピオボエをへてメイクテーラーに向かったのでした。すでにイラワヂ河畔の戦闘で優位の英印軍は連日、戦車と戦闘機がペアになって地上掃射を繰り返し、帝国陸軍も支離滅裂、右往、左往するだけで、穴から出ることもできず、文字通